

開催地名	愛媛県西条市
開催日時	令和7年12月17日(水) 13:15 ~ 15:00
開催場所	西条市立丹原西中学校 体育館
語り部	武蔵野 美和 (岩手県陸前高田市)
参加者	丹原西中学校生徒、教員、地域住民 52名
開催経緯	本市、丹原地域は地震が起きた時、津波被害は無くても土砂災害や、豪雨などあれば水害が想定されている地域ですが、子供たちの防災意識は高くないため、災害を自分ごととして捉えてもらうために、本プロジェクトを通してお話を聞く機会を設けた。
内容	<p>(1) 遠い被災地の話を「自分事」に変えるということ</p> <p>私は岩手県陸前高田市から来たが、陸前高田と聞いて、ピンとくる人は多くないと思う。遠いところからわざわざ来て、かわいそうな人の話を聞かされるのだろう、大変だったのだな、そう思う気持ちも大切なことだ。</p> <p>近年、日本各地で大きな地震が相次いでいる。夏には宮崎県で大きな地震が発生し、後発地震情報が出され、海水浴場の閉鎖や観光への影響が出た。同様について先日まで青森県から千葉県に至る広範囲で後発地震情報が出ていた。青森県では震度6強の地震も発生している。震度6強とは、起震車で体験する震度7に近い揺れが、何の前触れもなく突然襲ってくるのである。</p> <p>沿岸部に住む私たちは、地震が来たら津波が来るという心構えを常に持っている。しかし、内陸部や津波の心配がない地域に住む人にとっては、「自分たちには関係ない」と思ってしまうこともあるだろう。だからこそ私は、防災意識をどのように身につけるのか、自分事として考えてほしいと思う。遠い被災地の話は現実感を持ちにくいかもしれないが、災害のリスクも地域ごとに異なり、無関係な場所は存在しないということ。</p> <p>修学旅行に行くとき、足りないものがないか考え、必要なものを詰めて荷造りする。防災の備えも同じで、今の日常を続けるために、災害が起きたら何が必要かを考え、準備しておく必要がある。防災リュックや持ち出し袋は、自分の大切な生活を守るための荷造りなのである。</p> <p>(2) 東日本大震災での陸前高田市の被害</p> <p>陸前高田市は岩手県の沿岸南部に位置し、隣は宮城県気仙沼市である。リアス海岸の地形を持ち、津波被害を受けやすい地域として知られている。しかし、地図を見れば分かるように、海に直接面している部分は市域のごく一部にすぎない。それにもかかわらず、陸前高田市は「壊滅した街」と呼ばれるほどの被害を受けた。</p>

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。陸前高田市の震度6弱であったが、揺れは非常に長く、約3分間続いた。マグニチュードは9.0であり、これは岩盤が割れてエネルギーを放出し続けた時間が極めて長かったことを意味する。立ってられないほどの横揺れが続き、私自身も家から庭へ逃げ出した直後、出窓が目の前に落ちてきた。もしかしたら、下敷きになっていたかもしれない。当時の陸前高田市の人口は約2万4千人であったが、犠牲者は1,700人を超えた。そのうち300人から400人は、指定避難所に避難したにもかかわらず命を落とした人々である。さらに、今なお200人以上が行方不明のままである。津波による被害では、犠牲者数に幅が出ることもある。それは、建物ごと流され、どこで亡くなったのか特定できない人が多いからである。

津波は、押し寄せるだけでなく、引き波によって人や建物を海へ連れ去る。その後、再び押し寄せる波がそれを繰り返す。その過程で、遺骨が遠く離れた場所に流れ着くこともある。実際、岩手県山田町で行方不明になっていた少女の遺骨の一部が、南三陸町で発見され、DNA鑑定を経て身元が判明するまでに3年を要した。いまだに陸前高田では200人の方が行方不明のまま、そうやって待っている人たちがたくさんいる。

(3)津波の破壊力と避難の現実

陸前高田市で浸水した面積は、市全体の約6%にすぎない。しかし、建物の半数が失われた。これは、市役所、病院、学校、公民館といった重要な施設が、海に近い平野部に集中していたためである。その結果、指定避難所であったはずの場所が、多くの犠牲者を生むことになった。

津波の高さは最大で17.6メートルに達した。これは5階建ての建物を覆う高さである。川を遡上した津波は、海から5キロも離れた場所で11メートルを超える高さに達し、家々をなぎ倒した。津波は波ではなく、水の塊であり、鉄の塊が突進してくるような破壊力を持つ。陸上での速度は、オリンピック選手が全力で走る速度に匹敵すると言われている。

市役所では、多くの市民が手続きを行っていた時間帯に津波が襲った。避難を呼びかける中で、建物の3階までが浸水し、111人の職員が犠牲となった。避難誘導にあたっていた人々の命も失われた。立派な行動であっても、命を落としてしまえば取り戻すことはできない。

一方で、高台にあった陸前高田市立第一中学校は、多くの人の命を救った。完成したばかりの体育館は避難所となり、最も多い時には1200人以上が身を寄せた。紅白の幕やカーテンは寒さをしのぐために使われ、人々は肩を寄せ合って夜を明かした。場所の選択が生死を分けたのである。

(4) 教訓と伝承、防災意識を未来へつなぐ

震災の2日前、3月9日にも震度5の地震と津波注意報が出ていた。その日は県立高校の入試日であり、注意報が出ていながら避難せず、試験は継続された。この「たいしたことはないだろう」という判断が、後の行動にも影響したのではないかと検証が行われている。ハザードマップを過信し、「ここまでは来ない」と思い込んだことが、多くの犠牲につながった可能性がある。

その反省から、警報や注意報が出た際には、児童生徒を保護者に引き渡さず、学校に留めて一緒に避難する方針が取られるようになった。引き渡したことで自宅に戻り、犠牲になった例が多かったからである。

陸前高田市の震災遺構として残された建物には、津波が到達した高さにマークが付けられており、それより上は助かった場所という意味で残されている。津波に追われ、屋上のさらに上、煙突に登り、暗闇の中で波が引くのを待ち助かった方がいるが、その方も語り部を続けている。

こうして伝承することは、自分たちが犠牲になったものも含めて、語り継がなければいけない。津波の脅威を後世の人のために、皆で残していきたい、そんな思いで伝承活動をしている。

(5) 災害は必ず起こるという前提に立つ

南海トラフ地震は60～80%という高い確率で発生すると言われている。雨が降りそうであれば傘を持つのに、なぜ多くの方は災害への準備をしないのかと、よく言われる。1923年9月1日の関東地震、1995年1月17日の兵庫県南部地震、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震。これらはそれぞれ関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災と呼ばれ、日本の中で「震災」という名前が付けられた数少ない災害である。地震や豪雨などの自然現象は数多くあるが、「震災」と呼ばれるほどの災害になるのは、多くの命や暮らしが失われた時である。重要なのは、自然現象そのもので命を落とすことはほとんどない。社会生活を営んでいる場所で、建物が倒れ、火が出て、津波が押し寄せ、人の命や生活、財産が奪われたときに初めて「災害」になる。砂漠の真ん中や無人の山頂で地震が起きても、人に影響がなければそれは災害とは呼ばれない。

つまり、災害とは自然現象と人間社会が交差したところで生まれるものである。だからこそ、災害は必ずやってくるという前提に立たなければならない。大雨や地震が起きること自体ではなく、それが自分たちの命や暮らしにどう影響するかを考えた時、防災は初めて意味を持つ。

(6) 「大切なもの」を失わないための防災

ここで質問です。皆さんは大切なものを失った経験があるだろうか。その問いを聞いたとき、人によって思い浮かべるものは違う。なにか命に係わることもかもしれないし、ペットや思い出の物を失って、悲しい思いをしたかもしれない。災害とは、その人にとって大切なものが失われることである。だったら、その失われた時の悲しさが少しでも薄れるような努力をしていくべきではないか。そう考えていくことが、防災活動ではないかと思う。

近年、ペットとの同行避難が注目されているが、これも同じである。ペットはたかが動物だと言われることがある。しかし、その人にとっては家族であり、守りたい存在である。守りたい対象が祖父母や兄弟であれば当然とされるのに、ペットになると否定されるのはおかしい。笑顔でいられなくなってしまふもの、それが災害であると考えれば、防災とは笑顔を守るための工夫そのものである。

(7) 思いをつなぐことが防災になる

岩手県では、3月11日を「語り継ぐ日」としている。その背景にあったのが「最後だと分かっていたなら」という詩である。この詩は、アメリカの同時多発テロで息子を亡くした母親が綴ったもので、「最後だと分かっていたなら、もっと抱きしめてあげたかった」という後悔が込められている。その思いが、東日本大震災で命を失った人々を語り継ぐ日に重ねられた。大切なものを失った後に残るのは、後悔である。悲しみを一人で抱え込むのではなく、思いを語り継いでほしい。

次に一人の少年とパラコードのキーホルダーの話。震災後、多くの人に助けられ、少しずつ街が復興し、ずっと泣いていたお母さんにも笑顔が戻ってきた。その少年はお母さんが作ってくれたパラコードのキーホルダーをランドセルに付けて行ったところ、アクセサリーは禁止だと怒られた。少年は校長室に行き、自分の思いを言葉で伝えた。「お母さんが、みんなで頑張っていこうね、と言って作ったもの。だからこそ、自分も人を助けられる人になれるように、付けたいんだ。付けることを許してください。」ただの飾りではなく、決意の象徴であることが理解され、その子だけが許可された。物そのものの価値ではなく、そこに込められた思いが人を動かしたのである。災害の経験で得たことを、言葉で伝え、思いをつなげる人になってほしい。

(8) もしもに備えるという実践

災害は自然災害だけではない。熊の出没、林野火災、事故、犯罪など、人の社会の中で起こるあらゆる不具合が災害になり得る。災害は進化し、その形は時代や地域によって変わる。だからこそ、「もしも」を具体的に想像する力が必要になる。

	<p>そのための方法が「もしもマキマキ」である。起きた事象、季節、時間、場所、自分の気持ちを想像し、何秒後、何分後、何時間後にどう行動できなかったかを整理する。これは後悔を可視化する作業である。できなかったことを整理するからこそ、次に何を準備すればよいかが見えてくる。</p> <p>さらに、時間をさかのぼり、「1分前、10分前、1時間前、1日前、1年前に何ができたか」を考える。そうすることで、災害を完全に防ぐことはできなくても、被害を減らし、回復を早める手立てを見つけることができる。避難所で主体的に行動できた生徒の例が示すように、日頃の想像と訓練が、人を助ける力になる。持ち出し袋についても同様で、一次避難袋は命を守るためのものであり、重い荷物を詰め込む必要はない。普段から使っているもの、気持ちを落ち着かせるもの、大切なものをまとめておくことが重要である。しまい込むのではなく、使い回し、更新し続けることで、本当に役立つ備えになる。</p> <p>防災とは、物を備えることだけではない。心を備えることであり、思いを伝えることである。当たり前で明日が来るとは限らない。</p> <p>だからこそ、「ありがとう」という言葉とともに、大切な思いを伝えられる人になってほしい。今日の話が家族と共有し、それぞれの「もしも」を話し合うことが、未来の命と笑顔を守る第一歩になる。</p>
開催地より	<p>今日の生徒達は東日本大震災を知らないので、お話を聞いて良かった。防災は想像力を働かせることが大切であり、「もしもまきまき」のワークショップでいろいろなことを考えるきっかけになったと思う。</p>

